

るが、『乳岩姓名録』を補足している。

(一) 『春林軒隨筆』

伊藤震山(越後)

「尾州津島医妻 乳岩截断 三十余岩重六匁余」文政十

三年三月二日の松原定碩の妻(行年三十四核量九錢五厘)

と『乳岩姓名録』にある。以上の症例を加え既報告の再

検討を行った。

(新潟大学)

『及彼』(豚解剖書)の研究について

末田 尚

緒言

本書は、故石原明氏が「日本解剖集成」で本文のみ発見、その獨創性を紹介された。また杉立義一氏も「京都の医学」で言及されたが、序、例言、跋、附図を缺いてその全容は不明であった。吾等は郡医師会史料調査中に、当郡加計町井上堯氏の藏書中に「及彼」の完本を発見、その検討をしたので報告する。

(一) 「及彼」井上本の内容

井上本は「及彼完」「及彼図」の二冊よりなり、前者は二三・五一八種卅二枚、後者は二四・二×一八種十九枚の和紙袋綴の彩色筆写本である。時間制限のため、石原本に

無い文及び相違点を指適する。「自序」は幼児より医を志し漢方学を学ぶも納得せず、官許を得て長崎駟野齋塾に入り、内景より医療に至る蘭方医学に感激し、昼夜研究した。ある日、友人等と相談し円山京舗の別荘で牡豚を解体し、豚は人と靈不同であるが、内景は殆んど相違ないことを、私はその場で口述し、先生の関定を請け、画工にその真景を画かして一書を草し、「及彼」と命名した。豚の臓を見て、人の臓に及ぼす義である。この序は解体実施後二年文化十四年五月に駟野齋塾にて書いている。

附言は、本書作成の経緯と意図及解体の注意事項を精細に記述し、解体時の役割分担者名を記している。教授新宮涼庭、訓導は安芸吉村文哲、日向甲斐文貞、検図仙台管元龍、検査は尾張永田良達、執刀長崎菊谷藤太、助力出雲玄的、給事周防良斉、司番日向正蒼、磨力安芸元仙、席主薩摩常安、財副丹後七郎、給事阿弼正活、画工長崎柳岐山、広文刷で、始五人は涼庭の大著「窮理外科則」等の例言、筆録、跋文を記した高弟だが、他は不明である。

次に、解体の用器を列記してあるが顕微鏡は注目に値する。この例言は管以貞元龍が識したものである。跋、祭豚

文は日向甲斐貞によるものである。

「及彼図」の前文には目次に祭豚文、解図、豚全形之図があり、第一章から第二六章までは本文の各章に対応した図で、和風画か又は写本のせいか粗雑な図もある。

彼等は「医範提綱」等を熟読しているもので、人豚の別を明らかにし内景は大差なしとしている、按文には独創的な所見がいくつもある。例えば、腸脱疽、吐方への注意、灌腸術、肝硬変、肝アプセス等を石原氏も認めている。十九世紀初頭まで、本邦の解剖書には「血」の項少く「血胞」の物理的記載は殆んどない。

石原本と井上本と、涼庭の「血論」を比べると

	石原本	井上本	血論
血胞比重	一〇一三	一〇八三	一〇四五
血胞直径	八寸二千九百	八寸二千九百	八寸二千九百
	四十分の一	四十分の一	四十分の一

又石原氏は、此豚解剖時、脾と脾を混同せりとされているが、井上本では「脾者状如葱在胃底之左方而……」

「脾者状如牛舌横居于胃下其質腺以泌別脾液自脾管注于十二指腸……」と混同していない。第二章乳糜道

第二三腎之図膀胱陰莖、第二章膀胱之図、第二五童子宮

懐胎之図等は、皆連続之図で理解に便であるが画は粗い。二七章以下骨靱帯、耳、目は正直に「故に目撃の及ぶ所を挙げ其末だ及ばる者の如きは姑くこれを闕き以て他日を俟つ」として略している。以上で「及彼図」は終り、「及彼」の裏表紙に蘭字で「井上元庵」の署名がある。

(二) 考察

著名吉村文哲字忱号子廸、沖和堂、広島県高田郡上根村立川省庵芸笏家老上田家来医の三男として生れ、文化十年同藩吉村信頭の嗣となる。文化十一年長崎に官許を得て遊学。駆豎齊塾にて蘭方医を修む。文化十二年五月豚解体。同十四年「及彼」を著す。文政元年一月帰藩、蘭学塾を開く。国の内外より門人多数。三月涼庭の広島府逗留願書を官に提出。(上田家文書) 又「窮理外科則」第三篇の例言を記す「及彼」の所蔵者井上元庵も文政七年より十二年まで文哲に蘭学を修めたが、若年で死す。文哲は蘭方治療により扶持を増加、御匙医と隠居を繰りかえし、上洛も不許可。安政三年五月没す。享年六十三歳。

(三) 本書の特色

「血」の項の物理的記載は、涼庭述「血論」に類似点あり、同書の数種の写本を調べたが、東京本、日高本の的遠ト麻私血論の「ト」氏は「Thomas Schwenke」であつたが、その附図七図は未見である。しかし赤血球を記載された本邦の解剖書は管見にして之を知らない。よつて「及彼」の日本血液学の初期のものであることは注目に値する。

※本研究は、長崎博物館の永松実氏、本会の酒井シヅ・杉立義一両氏に認められ、西洋血液学史については、原医研蔵本淳氏、ライデン大学ポイケルス氏、石田純郎氏の御指導を感謝したい。

(広島県山県郡医師会史編纂委員会)